

---

# 心は何処に 壊滅都市

神坂 保温

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心は何処に 壊滅都市

### 【Nコード】

N7143I

### 【作者名】

神坂 保温

### 【あらすじ】

2020年4月4日 謎の飛行物体が世界中に落ちた。ロシアや中国、イギリスなど世界各国で飛行物体が落ちた都市は『壊滅都市』と言われた。そしてその地域で1種類の生命体が発見された。名前は「ブレーン」と呼ばれた。同時にその地域で脳と心臓を喰われる事件が発生。事件の犯行は全てブレーンだとわかった。そしてブレーンに襲われた人の中から一命を取り留めた人もいた・・・が。2030年4月4日 謎の飛行物体が落ちてきて10年がたった。同日僕はブレーンに襲われた。脳を4分の1、心臓を半

分喰われた。そして 能力者になった。 大切  
な者を守るために戦う？大切な自分を守るために逃げる？アナタナ  
ラドウシマス？

(11月23日：あらすじを修正しました)

## プロローグ

2032年6月7日

ガン という音が路地裏に響いた。

空き缶をその少年が蹴ったせいだった。

靴は白いがそれ以外真っ黒。下半身から上半身、何処を見ても真っ黒な服だ。

顔は整っていて、眼も黒。髪も黒と何処から見ても日本人だった。

少年の名前は赤屋信世<sup>あかやしんせ</sup>。

「くそ、あのブレーン何処行っただ」

路地裏をただ赤屋は走り続ける。

途中で曲がり道があるが、気にしなかった。

路地裏にブレーンが入る前に傷をつけていたのでテンテンと血の跡があった。

赤屋が前を見ると路地裏を抜けて道路に出ていた。

「やばい、この時間なら人は少ないが誰かが襲われたら・・・ツチ」

そして血がついている左方向を見ると20mぐらい先にヨタヨタとブレーンが歩いていてた。

何度見てもその姿に赤屋は慣れなかった。

四つん這いに歩行する生物で、全身ドス黒い赤色の生命体。人の脳と心臓を食べるたびに大きくなっていき、一定量を超えると進化すると赤屋は聞いた事がある。

顔の3分の1はでかい口、目玉は青色とかなり目立つ。

前足は人間の体を開けられるように鋭い爪となっている。

「何度見ても気持ち悪いな」そう言いながら赤屋は手から短剣を出した。

赤屋の能力は手から刃物を出す事ができる。大きさは何処までも大きくすることが可能。

正し使いすぎると貧血になってしまふ。血液中の鉄分から作り出しているからだ。

「キヤアアア！」

前方から叫び声が上がった。

よく見ると路地裏から出てきた少女がブレインを見つけてしまったらしい。

「何でこんな時間帯に一般人が・・・」

ブレインじたいもう弱っているのでは頭を潰すだけだった。

こんな所で死体が出来ても困るので赤屋は勢いよく走った。

3秒ほどで追いつきブレインの頭に短剣を刺す。グチャという音とともにブレインの頭が破裂した。

辺りに真っ赤な血が飛ぶが赤屋は特に気にしなかった。

赤屋が周りを見てもさっきの少女はいなかった。

「そのまま、走って逃げたか？」

一人呟く赤屋だったがすぐにポケットからジリリリリと携帯が鳴った。

電話に出ると相手はやはり依頼主。

「よく、やってくれたな」

何時も通りの機械音が携帯から聞こえてきた。

「いえ、俺はただ殺しただけです。それより貴方は何で毎回任務が終わったことがわかるんですか？ブレーンを倒すとすぐに電話がかかってくる」

「そんな事気にする必要はないだろう？君は依頼をこなして金を貰えれば十分のはずだ」

(こいつ何処からかやはり見てるのか？)

ふと、赤屋は考えたがやはりどうでもよかった。金さえ貰えればどうでもいい。

「・・・まーいいです。金は何時も通り銀行に振り込んでおいてください」

「わかっている。それでは次の依頼があればまた電話をかけるからな」

「わかりました」と言いながら赤屋は電話を切った。

ブレーンの死体があったところを見ると既に蒸発していて形はなかった。

「そろそろ4時か・・・」

腕時計を見ながら赤屋は呟き、帰路についた。

## 黒い犬と白い猫

ジリリリリリと部屋中に携帯の音が鳴り響いた。

畳六畳と小さな部屋に中央に古びた机、窓側にはテレビが置いてあるだけだ。

家賃5万のアパートだから文句は言えないのだった。

「んー？」畳の上にそのまま寝ていた赤屋はゆっくりと携帯に手を伸ばす。

「はい、もしもし」

少し荒い声を出しながら赤屋は電話に出る。

電話からはいつもと同じノイズ音と一緒に依頼主の機械音が聞こえてきた。

「こんばんは？かな。また次の依頼だ」

（ツチ、また仕事か・・・）

心の中で舌打ちをしながら赤屋は電話の方に集中する。

「次の依頼はどんな内容で？といってもまたブレイン退治ですよね？」

「いや、今回は別の仕事だ。ある物を奪取、又は破壊して欲しい」

（こいつ俺の能力を知らないのか？）

赤屋の能力は手から刃物を出す・・・というのが普通だが実際のと

ころ手で触れれば金属を色々な形に出来る。  
そんな能力を物を奪い取るのに使えるとは考えにくいと考えた赤屋  
だった。

「別に能力者を使う必要はないのでは？しかも、俺の能力は金属を  
色々な形に変えられるだけです」

赤屋が否定するもののすぐに依頼主は応答してきた。

「奪う・・・といつてもある一台のトラックに入っている物を奪取  
するか破壊するだけだ。確かに他の者に頼んでもいいが、昨日言っ  
たとおり君は金さえ貰えれば何でもするだろ？」

確かにそうだった。生活するうえで金は必要不可欠。赤屋も他の仕  
事があるわけではなかった。

「わかりました、その依頼受けましょう」

最初から断るつもり何て赤屋は全くなかった。

(しかし、二日続けての依頼とはまた妙だな)

「それでは物の奪取、又は破壊は午後9時に決行してくれ。詳しい  
事は君の家の前に置いてある資料を読んでくれ。それでは」

「ちょっと・・・」と言う前に携帯は切られた。

少しの間携帯を見ていた赤屋だったがすぐにポケットに閉まった。

「俺が依頼を受けなかったらどうするつもりだったんだ」



そう呟きながら赤屋は立ち上がり、窓の方に歩いて行く。

「もう夕方か・・・」

カーテンから漏れる夕日が赤屋には見えた。

例の物奪取、又は破壊決行：残り3時間

「ハアーハアー午後8時50分、ぎりぎりだな・・・」

真つ暗の倉庫の中で荒い息遣いが静寂をやぶっていた。

倉庫と言っても学校の体育館ほどしもなく段ボールがそこらじゅうに積み上げている。

赤屋は持っていた肩下げカバンの中から茶色の封筒を出した。

封筒の中には資料が入っている。トラックの色、護衛の車が何台かなど色々書かれていた。

「トラックの色何ていらなんだろ・・・にしても護衛がいるからこんな物騒な物を置いてあったのか」

赤屋は自分が握っている手榴弾を見ていた。

「今のご時世だから日本でもこんな物手に入るのか・・・」

一人考えているとガァーという音が聞こえてきた。

「ほとんどきつちり9時にくるか・・・」

段ボールの陰から車を見ると、出口から普通車・トラック・普通車と並んでいた。

ドアを開けて外に出る様子はなく何かを待つてるようだった。

「ちょうどいい、こちらの方がやり易い」

カチツ　と手榴弾の安全ピンを抜きレバーを一気に引く。

自分のいる反対側に赤屋はおもいきり投げるとカランカランという音が聞こえた。

バーンと気持ちがいいくらいの音が鳴ると今度はドアが開き、黒スーツの男達が爆発した方向に走って行った。

その間に赤屋は段ボールの物陰に隠れながらトラックの後ろに走って行った。

トラックを開けようとするがガンガンと開かなかった。

「やはり鍵がかかっているか・・・」

そう言いながら赤屋は鉄で出来ている扉に人差し指で円を描くとその部分に亀裂が入り、押すとぽっかりと穴が開いた。

赤屋は頭を屈めて中に入る。

「おい！何だこの爆発は！誰かの罠か！」

爆発があつたところから一人の男が大声をあげていた。

「誰かがやったから爆発が起きたんだろ。馬鹿どもが」

赤屋は呟くと円型に切られた鉄板を掴み腰を屈ませて穴が開いている位置に戻し、切断面にまた指を押し当て接合する。

「これで入ったとは思わないだろう」

そう言いながら立ち上がり後ろを見ると大きな鉄でできた長方形の箱が置いてあった。

「これがあいつが言っていた物か・・・」

暗がりでもよく見えないものの大きさは横が3m、縦が1mほどだった。

「奪取にしても壊すにしても一度中を見てみるか」

そう言いながら赤屋は箱の横に来てみるとボタンが10個程度あった。

開・閉、その他数字のボタンが怪しく光っていた。

開のボタンを押すとプシューと音がなり真ん中から左右に開いた。

「さて、何が入って・・・何だこれ」

そこには一点の汚れもない真っ白な服を着た少女が眠っていたのだった。

午後9時20分 目標発見

## 黒い犬と白い猫（？）

「すごい」赤屋は感嘆の声を漏らした。

彼女の汚れない真つ白の服のせいかもしれないが、この世のものとは赤屋には思えなかった。

今の日本・・・謎の飛行物体が落ちてきて東日本の治安は最悪だった。

落ちた場所が東京だったのが悪かったのかもれない。

東京に一極集中している日本だったので飛行物体が落ちてからは都市は京都に移された。

そして東日本は完全に危険区域に入った。

毎夜、毎夜とブレインが出現するから仕方がなかったのだ。

最初は関東地方だけだったが10年もの間に出現地域をブレインは増やしていた。

今の西日本は全く被害はないがその内ブレインが出現するだろう。

東日本で決まっている事は一つだけ

『日が落ちたら外に出るな』

昼間はブレインも出ないようだが夜になれば出現する。

そのせいか、夜は悪党のパラダイスだった。警察連中も死にたくないのだから何かもしない。

結果、東日本の治安は最悪だった。

しかし、この少女は何かが違った。

この治安最悪の東日本にいるがこの少女だけ汚れていなかった。

「天使何ているならこいつのことを言うのか・・・」

赤屋は少し声を漏らしてしまった。

「こいつを破壊・・・依頼人は何を考えている」

今まで赤屋は人を殺したことがないのもあったが、この少女を殺すことはとうてい出来ない。

スツと少女に赤屋が手を伸ばそうとすると車内が揺れた。ブスワーと音ともにトラックが動くことがわかった。

「くそ、途中下車しろというのか」

赤屋に少女を抱えて逃げることは正直難しかった。

「だけど、置いて行けないよな」

心の中で赤屋は決心すると後ろを向きトラックの壁に自分が通れるほどの円を指でなぞった。

亀裂が入り上手にその部分だけ外に落とさずにトラックの中に入れた。

「後は、こいつを抱えて外に出るだけか」

赤屋は少女の方を向き彼女の背中に両手をまわし鉄の箱から取り出した。

「軽いな・・・」身長割にその重さ、赤屋はついつい声を出した。

穴が開いている外の方を見ると街灯の光がほのかに光っていた。ダンツ とトラックを蹴って赤屋は外に飛び出した。

赤屋は道路に着地した瞬間に足を屈め衝撃を和らげた。

左の方からキキィー！と車が急ブレーキを掛けたのが分かった。

「おい！あいつサンプルを持ってトラックから出てきたぞ！」

トラックの後ろを護衛してた車から男が出てきて叫んでいる。

「遅いんだよ、馬鹿どもが」

前方にあるガードレールを飛び越え路地裏に赤屋は入って行った。後ろから4、5人走ってくる音がしたが、赤屋は気にせず暗い道突き進んだ。

真っ白な少女を抱えて……。

午後9時50分 目標奪取

## 黒い犬と白い猫（？）

赤屋はアパート前にまで来ることが出来た。

「何時見ても、ぼろいな」

前にある木造建築のアパートを見て赤屋は呟いた。

築・・・30年といったところだった。

1階と2階に分かれており左の階段から2階には昇れる。

1階は6部屋あり、2階は7部屋ある。

あの男達が追ってこないのを見ると途中で引き離せたらしい。  
鉄の階段を昇りながら赤屋は少女を見る。

（こいつを依頼主に渡していいのか・・・？あの男達がサンプルと叫んでいた。何かの実験対象か？）

ガンガンと2階の床を歩きながら赤屋は考えていた。

いつの間にか自分の部屋の前に来てたことが赤屋は分かった。

しかし、両手を塞がれているので仕方なくドアを1、2発蹴った。

夜中のアパートにバンバンという音が響いた。

「俺だ、信世だ。両手が塞がってるからドア開ける」

部屋の中から「んー？」という声とともに古びたドアがゆっくりと開いた。

しかし、ドアが開いてみるとそこには誰もいなかった。

「おい、馬鹿師匠。今度は何に変身してる」

そう言いながら赤屋はドアの下の方を見ると茶色のアライグマが座っていた。

「馬鹿とは失敬だな。ついでに今度はアライグマだ。こいつはいいぞー何よりも動きやすい。ん？誰だ？お前の抱いているお嬢さん」

こちらをアライグマが見上げながら話しかけてきた。

「依頼の物だ。詳しい事は中で話す」

そう言いながら赤屋は靴を脱ぎ部屋の中に入って行った。

「全く今度はどんな依頼を受けたんだ」

はぁーとため息を吐きながらアライグマは赤屋の後について行った。

「で、そのお嬢さんは誰なんだ？」

アライグマが部屋の中央にある机に座りながら赤屋に問いかけてきた。

「知らん、こいつが起きたら聞けばいいだろう」

少女を窓側の畳の上に寝かせながら赤屋は答えた。

「おいおい冗談だろ。見ず知らずの少女をお前は家に連れてきたのか」



「こいつは依頼の物だ。依頼主から電話が掛かってくるまで置いておくだけだ」

それだけ言うと浴室に赤屋は向かった。

「何だお前、今から風呂か」

「二日続けて仕事だったんだよ。彼女が起きてもビビらせるなよ」

「あいよー」と言いながらアライグマは机を下りて少女の傍に近寄った。

赤屋のアパートは廊下の途中に浴室がある。後はトイレと台所があるだけだった。しかし、4年前から赤屋はここに住んでいるが台所はほとんど使ったことがない。ガラスと扉を開け、赤屋は浴室に入って行った。

「また厄介な物家に持ってきやがって」

アライグマは少女の傍に座りながら呟いた。

彼・・・狭間俊はざましゅんは4年前ブレーンに襲われた赤屋を拾った男だった。変身能力に長けていて動物なら何でも変身出来るという。しかし、あまりにも長いこと動物の姿だと人間の姿になった時に体がおもうように動かなくなる。

この能力は戦闘には使えないが、彼自身がかなりの身体能力を持っているので不必要。もしも、戦闘に使える能力だったら鬼に金棒だった。赤屋でも闘えば1分ともたないだろう。

狭間が少し下を向きながら考え事をしていると前方で何かが動いた

ような気がした。

「ん？」と狭間が言った時には既に遅かった。ガシツといつの間にか起きていた少女に両手で腹を鷲掴みされた。

「っな！お前何する気だ！」

かなりの力で掴まれている・・・という事ではなかったが何かに押さえつけられていたら人間に戻れないのだった。そして無表情の顔で彼女はジーと狭間を睨みつける。

「・・・クマ」

彼女が出した第一声がそれだった。

時間は少し戻り、赤屋はシャワーを浴びていた。二日間の疲れを全て洗い流していたのだった。赤屋は思い詰めていた。

（奪取・・・又は破壊。依頼主は彼女を必要としていたのか？しかし、だったら破壊しては困るはず。そして、あれにそこまでする価値があるのか・・・？）

「とりあえず彼女に聞けば全部分かるか・・・」

ガラガラと浴室のドアを開けて真っ黒な服を着る。4年前狭間が買ってくれた物だった。

「もうこれを着て4年も経つのか」

少し昔のことを思い出そうとしていた赤屋だったが部屋の方から叫び声が聞こえてきた。

「っな！お前何する気だ！」

誰かに襲われたのか！と思い部屋に急ぐ赤屋だったが、彼の目に映っていたのは少女が狭間を驚掴みしてる姿だった。

「……………クマ」

彼女がポツリと声を出した。

「何やってるんだ、お前ら……………」

赤屋は呆然と二人を見ていたのだった。

## 黒い犬と白い猫（？）

「お前、名前は？」

古びたマンションの一室に20歳前後の男と16歳程度の少女がアライグマを抱いて座ってる光景は少しシュールだろう。

少女は真っ白な服に日本人の顔だったが、目は青色。そう・・・ブレーンの目と同じ色だった。髪は銀色でツインテールになっていた。部屋の中央に置いてある机に座りながら赤屋は少女に問いかけた。

「私・・・リリス」

「おいおい、お嬢さん。あんた外人さんか？」

リリスの胸元に抱かれている狭間が上を見ながら言った。

「あ、このクマ・・・しゃべる？」

「クマじゃない、俺は能力者だ！」

リリスの腕の中で狭間はジタバタ動いていた。

「俺は赤屋信世だ。そっちの馬鹿クマは狭間俊って名前だ」

「誰が馬鹿だ！」と言いながら必死に狭間は抜け出そうとしていた。

「え、と・・・このクマの能力って・・・変身？」

「いちおう変身だ。ついでに俺は金属変換の能力を持っている」

リリスはキョトンとしながら狭間の方を見た。

「私・・・クマより猫がいい・・・」

「っな！」と言いながら狭間は抜け出すのを止めてリリスを見た。

「だそうだ、馬鹿師匠。猫ぐらいなつてやれよ」

右手を上げながら赤屋は狭間に言った。

「ま、お嬢さんの頼みなら仕方ないか・・・」

リリスが優しく畳の上に狭間を置いた。すると狭間はアライグマの姿だったが、顔の方から徐々に猫に変わっていき数秒で茶色の猫になった。

しかし、リリスは少し不満げに猫を見ていた。

「私・・・茶色嫌い。白が好き・・・」

「ツチ、わがままなお嬢さんだな」

狭間は呟いた。そして軽く顔を回すと茶色の毛が頭から白色に変わっていった。

ジーと変身するところを見ていたリリスだったが白になった瞬間に両手で掴みまた自分の胸元に持って行った。

「って結局掴むのかよ!」

ギャギャーと狭間は騒いでいたがリリスは「可愛い・・・」と言い

ながらムギューと人形を抱くように狭間を抱いていた。  
その光景を見ていた赤屋は少し口元をひくひくさせていた。

（何なんだ、こいつ……。俺らが能力者と分かってても怖がろうとしない）

能力者になるには脳と心臓を喰われなければならない……。というのが赤屋の知っている能力者になる唯一の手段だった。脳と心臓を喰われても生きてる人間なんて周りから見れば完全に『化け物』。それがなくても能力なんて危ないものを持つてるから周りは避けてしまう。

結局能力者は『化け物』だった  
だけど、この少女はまるで怖がろうとしない。

（まさか彼女も能力者……。？）

赤屋の頭の中でその考えが過った。しかし考えても仕方ないと思った赤屋はリリスに聞き出すことにした。

「本題入るぞ。お前なんで捕まってた？」

無表情でジタバタする狭間を抱きながら赤屋の方を見た。

「私、サンプルだから……」

「何のサンプルだ？」

赤屋がリリスに聞いたが、彼女は少し黙ってしまった。そしてゆっくりと口を開けて小さな声で言った。

「ブレイン……。人工的に能力者を創ろうとしたの……」

「「っな」」

その場にいた狭間と赤屋は同時に声を出したのだった。

## 黒い犬と白い猫（？）

部屋に沈黙が流れた。

しかし、赤屋が静寂を一言で破った。

「誰が・・・いや何処の組織が創ろうとしている」

リリースの方を見ながら赤屋が言った。

ブレインの研究なんて個人で出来るものではない。何処かの大きな組織ではないとまず無理だろうと考えたのだ。

リリースはまたゆっくりと口を開けた。

「brains extermination organization・対ブレイン殲滅組織。確か・・・研究員がそう言った」  
ガンつと鈍器で頭を殴られる感覚を赤屋は感じた。

「brains extermination organization」  
12年前、ブレインが日本に出現するようになってアメリカから来た組織。

内部がどうなっているかは不明だが、平和主義の日本がブレインに對抗出来るわけないと軍事国家であるアメリカが送り込んできた。

そしてそれに猛反発した国会議員もやはりいた。

「自分の国ならば自分で守る！」と古い考え方の議員はそう主張したらしい。

しかし採決の結果、アメリカに賛同した。

そして現在BEOという名前でこの国を守っていた。

「ちょっと待て、赤屋。お前何処の組織から奪ったのか理解できて



るのか？」

狭間が感情のこもってない声で赤屋に言った。  
それでも、狭間自身は心の中ではかなり焦っていた。

「そんな問題じゃないだろ！あいつらブレインを殲滅する為と言って人体実験してるんだぞ！」

右手を横に振って赤屋は狭間が言ったことを否定した。しかし、その顔には少し不安があるようだ。

「おい、リリース！お前他に何を知ってる！」

赤屋が大きい声を出してもリリースは無表情のままだった。

(もしかしてこいつも心が・・・？)

赤屋がそう考えた瞬間にジリリリリリと赤屋の携帯が鳴った。

「くそ、こんな時に依頼人か」

リリースの肩を掴んで聞き出そうとした赤屋だったがスポンから携帯を出して耳に当てた。

携帯からは聞きなれた機械音が聞こえてきた。

「よくやってくれたよ赤屋君。物をよく奪取してくれた」

何時もと変わらない声・・・もし彼女から何も聞かなかつたら赤屋は激怒しなかつただろう。

彼の顔には怒りしかなかった。

「ふざけるな！お前何でこの娘を必要としている！お前もブレインの人体実験をしているのか！？」

「はぁーはぁー」と久しぶりに荒い声を出したせいで赤屋は興奮していた。

しかし、携帯からでも分かるほど溜息をして依頼人はまた話を始めた。

「君に質問をする権限はなしだ。今から言う場所に彼女を持って来い」

1分か10秒か分からないが沈黙が続き赤屋がそつと呟いた。

「嫌だと言ったら・・・？」

「おい！赤屋止める！このお嬢さんを守ってどうする！？」

小さい声で言ったが狭間は聞こえてたらしい。狭間は今までとは違う声を赤屋に向けた。

ブレインの実験をしているから彼女が必要・・・ならば依頼主も組織で動いてる可能性があり狭間は危険と感じたのだろう。少し間があつてまた携帯から声が聞こえた。

「はぁー君も馬鹿だな。そんな化け物になぜ情を移す？」

さっきよりも残念そうな溜息が携帯電話から聞こえてきた。

「化け物？実験の為とこんな少女を人体実験するお前たちの方がよっぽど化け物だ。俺は俺の考えで動く。悪いが今回であんたとの契約は破棄させてもらおう」

赤屋の言葉に迷いはなかった。その目に・・・迷いはなかった。

## 黒い犬と白い猫（？）

依頼主が何かを言おうとした時には赤屋は既に携帯を切っていた。狭間はジッと赤屋を見て口を開けた。

「おい、赤屋。分かっているだろうがお前の心は」

「わかっている。そんな事最初から・・・」

狭間が全てを言う前に赤屋は呟いた。もう聞き飽きたと赤屋は思っていた。

「私・・・どうすればいい？」

会話をずっと聞いていたリリスがまた声を出した。

「京都だ。そこに俺の旧友がいる。とりあえずそこに向かうぞ」

立ちながら赤屋が二人に言った。

旧友・・・昔すぎて実際今もいるとは赤屋は思っていないが彼にしか頼る人がいなかったのだ。

「おいおい、ここから京都まで行くのか？相手はブレイン殲滅が専門のBEOだ。途中で必ず足止めくらうのが関の山だぞ」

ストットリリスの手から離れて畳の上に狭間は立った。

BEO、敵は国だと考えるのが普通だ。赤屋もそれぐらい考えていると思ったがそれでも気になってしまった。

「自分の良心に従い、邪魔する者がいれば倒すだけ・・・師匠が昔、言ってくれた気がするな」

天井を見ながら赤屋は昔の事を思い出しているように言った。  
ツチ と透かさず狭間は舌打ちした。

そんな昔の事を出してきたら狭間も何も言えなかった。

「分かったよ。このお嬢さんを身捨てられないんだろ」

「師匠・・・」赤屋がその言葉を発する前にガチャツと車のドアが開く音が聞こえてきた。

「くそ、もう来たか」忌々しそうに赤屋が呟いた。

「師匠とリリースは窓から逃げてくれ。落ちあう場所は駅だ。途中でATMから下ろせるだけ金を下ろして持っていてくれ」

赤屋はポケットから財布を出して机の上に置いた。

「おい！お前だけで戦うのか！」

赤屋の顔を見ながら狭間は言った。心配もある、しかし赤屋に死んでもらったらこれからどうするか分からなかったのだった。

「相手はどうせ無能力者。殺しはしないから大丈夫だ」

玄関に赤屋は歩いて行った。

下を向きながら狭間は少し考えたが、すぐに無駄だと思った。

彼・・・赤屋は昔から決めた事は必ず実行する人物だった。4年間同じ屋根の下で住んでいる狭間にはそれぐらい分かるのだった。

「……。あーもう！しつかり駅に来いよ！」

裏から狭間の声が聞こえたが赤屋は気にしなかった。

『死ぬつもりはない、こんなところで』

赤屋の胸にはその言葉だけが刺さっていた。

## 戦う者と逃げる者

午後9時55分

男は腰を屈ませてビルの屋上から道路の真ん中に止まっている3台の車を双眼鏡で眺めていた。

彼の胸には銀色に光るバッチが付いている。

『警察庁隠密局ブレイク対策部』

彼の所属しているところだった。土井敦<sup>どいあつし</sup>、彼の名前だ。

「何だあいつ……」

双眼鏡から目を離し土井は呟いた。

5分前……予定通りにトラックがこの場所を通過しようとするといきなりトラックに丸い穴が開き、中から少女を抱いた男が飛び出した。

そして男はビルとビルの間路地裏に入って行った。

その後車から降りてきた男達は何やら騒いでいるようだった。

「あの男、サンプル持ち出しやがったな……。いやこちらの方がサンプルを手に入り易いか？」

土井の仕事はサンプルが無事に目的地まで運ばれるのを確かめるのだった。土井の所属しているところもサンプルを目的地で奪取しようとしていたのだった。

「あいつが何でサンプルの事を知っていたかはどうでもいい……が、BEOから奪取するよりは楽になっただろう」

土井が独り言を言っているのとジジジーと耳に付けている無線機から雑音が聞こえてきた。

「土井！サンプルが目的地まで来てないけど何か知ってる？」

「あー途中で誰かに奪われたよ」

土井が間の抜けた声を出すと無線機から怒声が聞こえてきた。

「あんた何してるの！サンプルを奪取するのが今回の目的でしょ！サンプル奪った奴追いかけてなさいよ！」

彼女・・・相川あいかわみちる紗羅は無線担当、というか後方から援助するのが仕事だ。土井みたいな能力者は直接戦いをするが相川みたいな無能力者はほとんど後方からの援助だった。

「あー俺、今ビルの屋上にいるんだよ。どうやって追いかけるの？屋上からノーバンジーしろってか？」

予定通りこの場所をトラックが通過するのを見るのが仕事の為、土井は現在7階のビルの屋上にいた。それを追いかけると無理な注文してきたので土井は顔をしかめながら無線に応答した。  
すると相川も分かってくれたようだ。

「分かったわ。でも、どうやってサンプル取り返すの？またリーダーに怒られるわよ」

「サンプルは銀髪に青色の目をした少女だぞ。そんな奴、目立ってすぐに見つかるさ。しかも、BEOから奪うよりはましになっただろっつー。」



無線から「うう・・・」と反論できずに相川が黙ってしまった。

「とりあえず本部に戻ってきて・・・。あんたからリーダーには言い訳しなさいよ」

土井が「あいよー」と言う前にブツツと無線は切られてしまった。

「全く素直じゃないんだから」

一人呟きながら土井は立ち上がり下に降りる階段がある方に歩いて行った。

同時に道路ではブルルウとエンジンの音が鳴っていた。3台の車がサンプルを奪取した犯人の元に行こうとしているなんて土井には到底分からなかった。

## 戦う者と逃げる者 ( ? )

ギギイーと赤屋はゆっくりとドアノブに手を掛けて玄関のドアを少し開けた。

隙間から外を見ると道路に黒い軽自動車が2台、トラックが1台止まっていた。

その前には黒いスーツを着た男達が8人いた。なにやら話し込んでいるようだった。

この時間帯、さらにここ東京はブレインがよく出現するので一般人はまず夜になると外に出ない。

(とすると、やはりあいつらリリスを運んでいたやつらか・・・)

ふと赤屋の頭にある言葉が過ぎった。

『無能力者相手なら一人で戦うだけだ』

ツフと赤屋は苦笑いを浮かべる。

昔・・・4年前ならたぶん狭間やリリスに自分だけで戦うと赤屋は言わなかっただろう。

一人で戦えば誤って相手を殺すかもしれない。それが嫌だったのだ。

『人を殺すかもしれない』

あの日狭間に問いただしていなかったら今この瞬間に言葉の重みに耐えきれず赤屋の心は潰れてしまってたかもしれない。

(いや、俺の心は潰れないか。どうせ俺は・・・)

ギチギチと血が出るくらいの勢いで下唇を赤屋は噛んだ。

そう・・・あの日

## 回想

2028年2月10日

その日は狭間に拾ってもらってちょうど8ヶ月が経とうとしていた。今と同じアパート・・・8ヶ月もすると嫌でも住み慣れている。

赤屋は畳に座りながらテレビでニュースを見ていて、狭間は一人新聞を読んでいる。

ニュースでは殺人事件の話題が上がっていた。その犯人は能力者だという。

能力者が生まれて8年、別に能力を使い殺人をする奴がいてもおかしくはなかった。

だけど赤屋はそんなニュースを何回を見て、ある疑問が生まれた。

「師匠。少し変な話になるが、俺達能力者は周りから化け物扱いされてるよな・・・そこで人を殺したら俺達は本当の化け物になるのかな？」

軽く聞いてみただけだった。

赤屋は自分が無理やりつけられてしまった力で『化け物』と言われるのが心底嫌だった。

「確かに本当の化け物になるかもしれないな。だけどな赤屋、能力者は普通そんなこと考えない生き物だぞ？」

予想外の答え。赤屋は狭間がそんな事を言つとは全く考えていなかった。

「なら師匠は化け物扱いされてもいいのか？」

少し反発気味に言ってしまった。次の瞬間には狭間の右手が赤屋の胸倉を掴んでいた。

「お前・・・本当におかしいぞ。能力者になって今何ヶ月経った？」

「は、8ヶ月」

赤屋の声は少し震えていた。

「8ヶ月でそこまで感情が芽生える・・・いや、心が豊かになっっている能力者は今まで見たことないな」

ゆっくりと掴んでいた手を放してくれたが赤屋は後ろに倒れてしまった。

「心・・・？どういうこ

」

赤屋が全て言い終わる前に狭間は指を指してきた。

「今まで言わなかった俺の責任かもしれないが・・・赤屋。俺達能力者に心なんて存在しない」

存在しない と狭間はためらいなく言った。

そして赤屋が何かを言う前にまるで前から暗記していた事を言うようにスラスラと狭間は話を続けた。

「赤屋は能力者になってから一度でも喜びや怒り、悲しみ、楽しみ・  
・人が本来持っている感情を出したことがあるか？」

ツ・・・ 赤屋は言葉に詰まらせた。

（8ヶ月前のあの日、能力者になってすぐは心にポツカリと穴が空いていた気がする。だけど・・・）

「だけど、俺やあんたはこうして普通に会話が出来ている。本当に感情がなかったら唯の機械だ」

否定をしたはずだが、赤屋の声は徐々に弱まっていた。

「確かにお前の言ってる事は正しく、俺の言ってる事は矛盾してるかもな。しかし人間は無くなったものを自己修復しようとする生物だ。いや、『元人間』だな」

『元人間』・・・その言葉だけ狭間の言い方にとげがあった。

「能力者は人間と交流を深めると相手の喜怒哀楽を覚える。だから、お前は俺から習ってるんだろうが・・・8ヶ月にしては妙に感情が豊かだ。ま、物覚えがいいことにしておこう」

狭間は全部言いたい事は言い切ったようだった。しかし、赤屋はまだ疑問があった。

「なら能力者はまた心が取り戻せ」

「無理だ」

ピシヤリと部屋の温度が下がったのは赤屋でも分かった。全く考えない。もう希望が少しもないみたいだ。

「一度喰われた心は戻らない。所詮人間から覚える程度、偽物の心だ。・・・心は何処に　俺達にピッタリの言葉だ」

最後の言葉は何処か寂しいそんな雰囲気が出ていた。

「そう・・・か」

赤屋の出した言葉がそれだった。感情のない目・・・狭間が拾った時と赤屋は同じ目になっていた。能力者のなり立ては誰でも心は空っぽだから仕方ないといえれば仕方ない。

「そう落ち込むな。代わりにお前の最初の問いに答えてやるよ」

反応はなし。下を向いてしまったから余計に何を考えているか分からない。

若干15歳の少年には少しきつい話だったかもしれない。

「俺は人から化け物扱いされても良いと思っている。俺達は人と掛け離れた力が使えるからな。そしてお前はその力を誇りに思えばいい」

「何でだ・・・」

赤屋は独り言のように呟いた。

「こんな人殺しの力なんて俺はいらぬ！ 誇ればいい？ この力のどこが誇れるんだ？」

『人殺し何かなりたくない』

結論から言うと赤屋はそれを考えていたのかもしれない。

「確かに人殺しにしか使えないなら俺だつていらぬ。 だけど、守りたい者を守る力なら誇つても良いと思わぬか？」

「え……」 赤屋は思わず声を出した。

「自分を犠牲にしても守りたい者。 お前の力なら守ることも出来るだろ？ だつたらそれを誇りに思つて何が悪い？」

赤屋が何かを言う前に狭間がさらに話しを続けた。

「その力を使えるから化け物扱い？ なら俺は化け物でも良いよ。 人殺しは嫌だ？ だつたら、殺した奴のぶんだけ生きれば良いだろ。 俺達の心は偽物、だから良心も偽物だろうな。 だけどそれは偽物だろつと今のお前の良心だ。 『自分の良心に従い、邪魔する者がいれば倒すだけ』。 その過程で人殺しをしてしまつても後悔しなくていいんだよ」

狭間はポンポンと赤屋の頭を叩いた。

「さて、今日はひさしぶりに飯を作つてやるよ」

狭間は赤屋の前に座っていたが立ち上がり、台所に向かった。  
一人取り残された赤屋は何も話そうとしなかった。いや、話せなかつたのかもしれない。

（だから、この人は嫌いだ……。人をこんな気持ちにするから）  
赤屋が能力者がなければ頼に何かが流れていたかもしれない。何でこんな気持ちになるのか……。その時の彼にはまだ理解出来なかった。

### 回想終了

「今俺は自分の良心に従えているよな、師匠」

ポツリと赤屋は呟いた。すっかり昔の事を思い出してしまった。

「従えている。だからまずは邪魔するあいつらを倒すだけだ」

決意を固め、赤屋はドアを開けた。



## 戦う者と逃げる者 ( ? )

赤屋がドアを開けると話し込んでいた男達の一人が気づき、全員がこちらを向いてきた。

「おい、サンプルはどこにやった？」

一番後ろにいるボスらしき男が赤屋に話しかけてきた。他のやつらと少し違い黒いサングラスをしている。年齢は・・・20代後半ぐらいだろう。

「お前らに言うと思ったか？」

ツチと2階にいる赤屋にまで聞こえるぐらいの舌打ちをしてきた。何時でも準備が良いようでボスらしき男以外全員拳銃を持っているようだ。

「先に言っておくが俺達はBEOだぞ。お前誰を敵にしているか分かっているのか？」

戦うより平和的にいきたいのか男達はすぐに攻撃はしてこないようだ。しかし、赤屋を生かすことはしないだろう。BEOが行っている人体実験の情報が出回ればすぐに日本からBEOは消えることになるだろう。

「リリースからだいたい事は聞いている。BEOもかなり腐った連中らしいな」

2階から落ちないように付けてある手すりに両手を置いて赤屋は男

達を上から見下ろしていた。上から見下ろされるのが嫌なのか男は顔をしかめた。

「リリース？あーサンプルのことか。あんな化け物に名前があったのか」

バキッと赤屋が両手を置いていた手すりから不可解な音が鳴った。しかし、男は気付かず話を続けた。

「全くのどこのどいつがサンプルなんか名前を付けたのか・・・。お前も思わないか？実験台何かに普通誰が」

バキッとさつきよりも大きな音が鳴り赤屋が両手を置いていた手すりはバラバラに砕けた。同時にヒュンと音が鳴り、男の髪の毛がサリと散った。

男が後ろを向くと地面に柄が黒く刃渡り10cmほどのナイフが刺さっていた。

「それ以上話を続けてみる。次は髪の毛ではすまないぞ」

赤屋の手にはどこから出したか、ナイフが握られている。

「お前そのナイフ・・・あーお前能力者か」

男はため息をつき面倒そうに両手を上げていた。

「能力者なら手加減しなくていいぞ、お前ら。死なない程度に相手をしてやれ。俺は先に戻っておくよ」

それだけ言うと男は車の方に歩いて行った。

「能力者もずいぶん舐められているようだな。無能力者がこれだけ集まっても何も変わらないというのに」

その言葉が合図だったかのように7人の男達が持っていた拳銃から火が噴いた。

## 戦う者と逃げる者（？）

拳銃から出た弾は赤屋の体に当たる前に男達の視界から消えてしまった。同時にカランカランと何かが落ちる音が響いた。

「拳銃で能力者が倒せると思うか？」

拳銃から発射された弾は消えてはいなかった。赤屋はナイフを持っていない方の手で能力を使い弾を薄い鉄板に変えたのだ。弾は厚さ数ミリの鉄板に変わり威力を失い床に全て落ちてしまう。

少し男達は戸惑っていたが赤屋はふと違和感に気がついた。1、2、3、4・・・違和感の正体に気づき少し赤屋は顔を顰めた。

「保険という事か？卑怯な手を使ってくるな」

それだけ言うと赤屋は下に降りる階段の方にナイフを投げた。同時にドタバタと何かが落ちる音と叫び声が響いた。

「足があ！俺の足が！」

階段の下でうずくまってる男はナイフが刺さっている足を握っていた。止まることなく血がタラタラと垂れている。

「隠れて狙うとはな。そこまでして勝てないと思うなら最初から戦おうとするな」

片手を手すりに置き軽々と2階から赤屋は飛び降りた。片手にはまたナイフが握られている。少しずつ前進する赤屋とは反対に男達は少しずつ後退する。

その中で一番前にいた男だけはまだ赤屋に銃口を向けていた。カタカタと少し拳銃が震えているようだ。それでも男は迷わず引き金を引く。バンッとクラッカーのような音が鳴り響くと同時に赤屋が走り出した。スパッとナイフで簡単に弾を切り落とされ男の顔は驚きに満ちていた。そして男の目の前にはいつの間にか赤屋がいる。同時にバキバキと骨が砕けた音が鳴り男の体は真横に吹っ飛んだ。赤屋の回し蹴りが男の脇腹に直撃したようだ。

「肋骨が何本かいったらろうが、死ぬことはないだろう?」

男は痛みでうずくまっている。当然答えることなんて出来ないようだ。

「次は誰だ?」赤屋は吐き捨てるように言った。

「アアア!!」という叫びと同時にパンパンとまた赤屋に向かって弾が発射された。

5つの弾は赤屋に吸い込まれるように飛んで行ったが一振りですパツと切り落とされる。

「くそお!この化け物が!」

男達の中の一人が初めて声を出した。

「そつだ、分かっただろ?俺は化け物だ。お前たちが敵うと思ったのか?」

「ツ……。逃げるぞ!」

一人が言うところ全員赤屋に背を向けて走って行った。せわしく一

番最初に車に乗り込もうとした男がなぜか吹き飛ばされた。

「下っ端がなに逃げようとしてる？所詮あいつも弾くらえば死ぬんだぞ！」

車から出てきたのはさっきのサングラスを付けている男だった。吹き飛ばしたやつから拳銃を奪い赤屋に近付いてきた。下っ端が役立たずで激怒しているようで男は赤屋しか見てないようだ。

だけど、赤屋は男なんか見てなかった。いや、見れなかった。もつと他の物、ボスらしき男の左側・・・他の男達も気付いてるようだが恐怖で声が出ないらしい。

今の世界を狂わせたドス黒い赤い色の生命体・・・ブレインがいた。

ブレインの目は真っ直ぐ男を見ている。そう、ひさしぶりに『獲物』を見つけて喜んでるみたいだ。そして、一段と大きく口を開けて男に飛びかかった。同時に男は赤屋の目線が自分に向いてないと分かり何かに気付いたようだ。がもう・・・遅かった。

「ギヤアアアア！！！」

頭に飛びつかれ少し男はジタバタしていたがグチャバキツと音が鳴りバタッと仰向けに倒れてしまった。

断末魔の叫び声が響き、恐怖で固まっていた男達はやっと行動でき

たようだ。急いで車に乗りどこかに逃げてしまった。同時に赤屋も何が起こっているか気づき持っていたナイフをブレーンに投げた。グチャと音が鳴りブレーンの頭は破裂してシユウと蒸発した。食事  
中だったからなのか避ける様子もなくあっさりと死んでしまった。  
ブレーンは死んでも消えるが・・・人間は死体として残る。

ゆっくりと赤屋は死体に近付くと思わず口に手を当ててしまった。  
心臓は嫌いなのかあまり喰われてなく胸は雑に穴が開けられていた。  
少し血肉が月明かりに照らせれて不気味に光っている。頭は上の部  
分が無理やり開けられており半分ほど無くなっているようだ。血肉  
と一緒に見える白い物は頭がい骨だろう。

（自分もこんな死に方したのか。確かにこれで生きてたら化け物だ）  
口に当てていた手をゆっくり外し地面に落ちているナイフを回収し  
た。

そして怪我をしている2名を病院に送る為に携帯をポケットから出  
した。しかし、今は夜なので当然病院には誰もいなく救急車が来る  
のは夜が明けてからだろう。  
さすがにずっと死体を見たくはないので赤屋はアパートの方に体を  
向けた。

「救急車お願いします。場所は」

ガァン！

何かが割れる音。

赤屋はなぜか下を見ってしまった。何も無い地面を。  
不思議に割れている地面を・・・。



## 戦う者と逃げる者（？）

何か強い力を地面にぶつけたみたいにビキビキとひび割れている。赤屋は能力者になる条件を頭の中で整理しながら自分が何をすべきかすぐに理解できた。携帯を持っていた手をダランと下げてゆっくりと後ろを見る。

まず目にはいったのは地面にめり込んでいる人間の足。

そしてその周りには雨の後みたいに水溜りが出来ていた。男の血で出来た綺麗な水溜り。

ゆっくりと上を見て赤屋の心の中にあつた疑問が解決できたようだ。そして地面が割れた原因も……。赤屋は創ってしまったようだ。

能力者を。

「目覚めた時ぐらい静かに出来ないのか」

2、3歩後退しながら赤屋は言った。

ゆっくりと地面からめり込ませていた足を抜いて男は赤屋の方を見た。

「目覚めて最初に思ったことが下半身が妙に軽い。試しに地面を蹴ったらこれだ。俺も能力者になったみたいだな」

頭から垂れた血が目に入ったようで男は目をこすっている。そして邪魔になったのか掛けていたサングラスを横に投げ捨てた。

その目は見たことがないほど死んでいて、まるで生気がないみたいだ。

その間にも赤屋は男と数メートル距離を置いた。

「全く俺も馬鹿だよ。ブレインに喰われかけの人間を助けたら能力者になるくらい分かっていた事のに……」

「ブレインに襲われた時は死んだな……。って思ったが、お前のおかげで能力者となって生き返ったようだ。礼を言おう」

男は両手を腰に置き赤屋に会釈してきた。

「お前から礼を言われても反吐が出る。どうせ、俺を殺そうとしているだろ？」

顔を上げ男は赤屋を凝視した。

胸は皮膚が再生しており綺麗に戻っていた。しかし、服は血だらけで誰が見ても救急車行きの怪我人だろう。頭も修復されているようだが血がまだ額から垂れている。

「確かに殺そうとはしているがその前に話したい。お前名前は？」

少し赤屋はためらったが黙っていても仕方ないと思い口を開けた。

「赤屋信世だ。と言っても信世は偽名……。いや、元の名前は覚えてない」

「俺は陸堂**椋介**。記憶がなぜか曖昧なのだがこれは能力者になったからか？それになぜか心にポツカリと穴が開いてるみたいだ」

「記憶が曖昧なのはブレインの脳を喰われただからだ。心にポツカリと穴が開いてるのはお前に心がないからでそれもブレインのせいだ。今度はこちらからの質問に答えてもらう」

陸堂はそこまで驚く様子もなく自分のスーツに顔を近づけ始めた。血が染み込んだスーツを匂って陸堂は露骨に嫌そうな顔をした。同時に頭から垂れ続ける血をかなり嫌がってるようだ。

「お前らが何で俺の居場所を特定できた」

陸堂はスーツから顔を離し、また赤屋を凝視した。

「俺達だってかなり焦った。目的はサンプルの輸送だったからな。しかし、そこで俺の携帯に1本電話がはいった」

赤屋に向かって陸堂は人差し指を1本見せつけた。

「相手は機械音で怪しかったが、お前たちのサンプルを奪った奴の居場所を知っていると云ってきた。そしてその場所に来るとお前が出てきたってわけだ」

ツチと赤屋は舌打ちをした。

依頼主を裏切った代償がこれだった。壊すこともできず自分の物にする事も出来ないようならBEOが赤屋を殺して奪った方がましらしい。

陸堂は手を開いたり閉じたりしながら赤屋を見ていた。

「質問はそれだけか？それなら、もういいよな」

「おい、まて。まだ話は

」

ダンと陸堂が地面を踏む音と同時に赤屋の目に2本の指が飛んできた。

## 戦う者と逃げる者（？）

頭より先に体が動き赤屋は後ろにのけ反らした。しかし、バランスを崩してしまった。

対して陸堂は左足で重心を取り右足で赤屋の脇腹に回し蹴りをしてきた。

脇に入ってきた足を赤屋は両手で持ったナイフで何とか防いだ。しかし、そのまま3メートルほど真横に吹っ飛んでしまった。

「今、自分から吹っ飛んだな？」

体を赤屋の方に向けて陸堂は話しかけた。

「そう、だ。ハアハアー。そうでもしないと脇腹が碎けていた。ナイフもこの通りひびがいつている」

荒い息を吐きながら片手でナイフを持ち陸堂に見せつけた。そして手にナイフを指し、体に取り入れた。

「お前の能力は、下半身強化といったところか。常人ではありえないその力」

赤屋は片手で陸堂の足に指を指した。

「まーそんなところだな。・・・次は目潰しで済まないぞ」

陸堂は下半身に力を入れ一気に赤屋との距離を縮めた。

勢いに任せて握った拳を赤屋に向けたが、赤屋は横に飛んでいた。

「二度も同じ手がきくと思うな！」

力よく握った拳が陸堂の顔に当たった。

しかし、彼は吹っ飛ばない。赤屋の拳が刺さった状態で片手を使い彼の頭を掴み、地面に無理やりひざまつかせた。

「ッグ・・・」と地面に顔を付けていた赤屋の頭上には陸堂の足があった。

「死ね」

陸堂はそれだけ言っと思いい切り赤屋の頭にかかと落としをした。

・・・京都市某所・・・

カーテンから月明かりが入っておりそれしかこの部屋に光はなかった。

勉強机、本棚、クローゼット、ベットと何処にでもあるような部屋だった。

少しおかしいのはベットの上で三角座りをして顔を腕の中に隠している少年だろう。

『相談しあうのが友達にきまってるだろー』

「黙れ・・・」

少年はポツリと呟いた。

『私たちはずっとあなたの味方よ』

「黙れ・・・」

またポツリと呟いた。

少年以外誰もいないはずなのに彼は何かを怖がっていた。

『ずっと、　　　　　のこと好きだか・・・』

「黙れ!!!」

声と同時に少年は左手を思い切り本棚に向けた。

瞬間、バキッと音が鳴り本棚からバラバラと本が崩れ落ちてきた。

右手で片目を隠し少年は落ちている本に目をいかせた。

「ハアーハアーハアーハアー・・・ウウウ・・・」

少年は小刻みに震えベツトの上にあるハサミを掴んだ。

しばらく握っているハサミを見て、ゆっくりハサミを上にあげた。

自分の片方の手に狙いを定めて。

手が震えそれでも自分の手に向かってハサミを刺そうとしたが、寸前で止めてしまった。

刺せなかった。刺す勇気もなかった。

ゆっくりと手からハサミは離れ、ストンと虚しくズットの上に落ちた。  
そして少年はまたポツリと呟いた。

「死にたい」



## 戦う者と逃げる者（？）

ギンッと金属と何かがぶつかり合う音が響いた。

「ん？耐えたか？」

陸堂の足元　　赤屋は両手に握った二つのナイフでどうにか陸堂の攻撃を耐え抜いた。

ギチギチの小刻みにナイフは震え、赤屋が少しでも力を抜くと頭を破壊されそうだ。

「こんなところで死ねないんだ」

ポツリと赤屋は呟いた。

両手に入っていた力はさらに増大された。地面につけていた体は徐々に起き上がる。

「あああああああ！！」

叫び声とともに陸堂の体は吹っ飛ばされた。

空中で態勢を整えたが勢いは止まらず地面に足を着いたままズズッと陸堂は後退した。

（あの姿勢からのあの力・・・火事場の馬鹿力か？）

力では陸堂が勝っている、そのはずだ。しかし、今はどう考えても赤屋の方が勝っていた。

しかし当の本人はそんな事は気にせずにもたまたまナイフを手の中に入れていた。

「どうした？妙に力が弱くなってないか？」

少し余裕の顔を陸堂に向けた。その顔は陸堂をイラつかせ赤屋に対しての疑問は消えていた。

作戦通り、とはいかない。どちらにしても陸堂はもう待つてくれな  
いだろう。

ズキズキ痛む頭と止まらない荒い息。

力の使いすぎ。赤屋自身がよく分かっていた。周りにある鉄を変え  
る事は体に影響はないが自分自身の血液をそう何度も使っていると  
貧血になることぐらい。

（何か血液の変わりになるものはないのか。鉄、鉄、鉄……。！  
！）

何かを見つけた赤屋は陸堂とは反対方向　アパートの方に体を  
向けて走った。

陸堂からすると訳が分からない。逃げるにしてもなぜアパートの方  
に向かうのか。そもそも、背中を向けるのは攻撃してくださいと言  
ってるものだ。

しかし、そんな事を考えてる前にさっさと倒して本部に戻りたい陸  
堂のとする行動は一つだった。

「そろそろ死んでくれ」

走り出した陸堂は勢いに乗り赤屋に飛び蹴りする。同時にアパー  
トの壁まで走った赤屋は体を再び陸堂に向けたがその顔に焦りはな  
い。

それにすら気付かない陸堂は愚か者かもしれない。

「その足、頂いた」

声と同時に赤屋は左右に立っている、アパートの柱に手をついた。

## 戦う者と逃げる者（？）

もし、赤屋が住んでいるアパートが古くなかったらこんな行動はしなかっただろう。

そもそもこのご時世に柱が鉄のアパートは逆にレアだろう。

運が良い…赤屋は内心こう思ってるだろう。

赤屋が手をついた柱から鋭く尖った槍らしきものが出てきた。

槍は一直線に陸堂へ放たれた。狙いは足。

対する陸堂は勢いを殺すことが出来ずにいる。空中からの方向転換なんて高度な技が出来るわけもなく、その顔は一気に焦りに変わる。陸堂の武器は足だ。足が使えなければ無能になる。

槍が陸堂の足に刺さり、戦いは終了。

「大事な戦力だ。そんなことさせない」

道路側から少女の声が聞こえた。

すると、陸堂の体はいきなり地面に叩きつけられる。同時に陸堂の上を鉄の槍が通過した。

「・・・他に仲間がいたのか」

柱からゆっくりと手を離し、声が聞こえた方を見ると12〜14歳ぐらいの少女が立っていた。

左手はこちらに向けて右手には携帯らしき物を握っていた。

地面に着いてしまいそうな長いスカートと首から垂らしているネッ

クレス、肩までしかない黒髪。

「は？ガキ？」

拍子抜けというか驚いたというべきか赤屋は少し唾然してしまった。

「おい、陸堂。生き返ったのなら電話の一つでもよこせ。お前が死んだと聞いたから運びにきたのだが……。まさか能力者になっているとはな」

しばらくの間地面に伏せていた陸堂だったがムクッと立ち上がり少女の方に体を向けた。

「すみませんでした。先にあの男の片付けてから報告しようと考えておりました」

話し終ると陸堂は少女に頭を下げた。赤屋の時とは違いしばらくその状態だ。

まだまだ幼い少女に頭を下げる20代後半の男性というのはなかなか見れない光景だろう。

「・・・まー良い。今日のところは帰るぞ」

「ッ！？」頭を勢いよく上げ、かなり驚いた顔をしている。陸堂がそんな表情をするのも無理はない。敵は1人でこっちは2人。しかも、陸堂相手でも十分に勝てる勝負だ。

「おっしやっっている事が少し理解できないのですが」

「そのままだ。今日は帰る」

「・・・わかりました」

不満そうな顔を浮かべ陸堂は少女のもとに歩いて行った。

「赤屋と言ったか？なかなか強そうだ。今度お相手してもらおう」

それを言うと少女は暗闇に歩いて行った。スーツ姿を男を引き連れて・・・

## 戦う者と逃げる者（？）

午後11時15分

ある駅のホームに少女が一人、柱にもたれかかっていた。夜に、しかも誰も居ない駅のホーム。危険すぎる行為だが少女にはボディーガードともよべる人物がいる。もっとも今はトイレに行っていないわけだが。

「・・・遅い」

少女は一言呟いた。

イライラしてるわけではなさそうだが、その声は少し怒ってるようにも聞こえる。

グチュ

少女の後ろから何かの潰れる音が聞こえた。

「危ない、危ない。おいおいお嬢さんもう少し周りにも注意を向けるよ」

柱の後ろを見ると茶髪で長髪の男がブレインを足で潰していた。

「・・・誰」

「まてまて！！俺だ狭間だ！」

「・・・猫がいい」

「・・・・・・・・」

思わず狭間を口を閉ざす。

180ぐらいの長身に黒と白で統一された服を着こなしていた。

「動物の体でどうやって戦えというんだ？」

狭間も柱にもたれかかって夜空を眺めた。

「赤屋・・・遅い」

「え、何そこは無視するのか！・・・あいつなら大丈夫だろう」

「・・・もし、このまま来なかったら？」

「・・・・・・・・」

狭間はまた口を閉ざしてしまった。

帰ってくるっと信じているのもあるが、もし帰ってこなかった時どうしようかという焦りを浮かべる狭間だった。

しかし、すぐに狭間の悩みは消えることになった。

「あれ・・・赤屋じゃない？」

いきなりのリリスの発言に半信半疑になりながら狭間はリリスが指をさす方向を見た。

すると、暗闇からやっと狭間も見えた。

駅のホームに来るための階段から彼の姿が。



どことなく疲れている赤屋の姿を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7143i/>

---

心は何処に 壊滅都市

2010年10月9日05時09分発行